

独立

ARTS JOURNAL
DOKURITSU note

/ - +

No.

4

2014



年刊

独立/ - + 第4号

- ターニングポイント
..... 絹谷幸二
- このひとに聞く
- つぶやき生の声!
- 出品者急増の大学から
- 制作虎の巻
- 独立展・あのことろ
..... 全創立会員
- 地方展の活動から



独立美術協会小史

【誕生 - 初期】(1930-1959)

1930年11月1日、清水登之(43歳)、鈴木保徳(39歳)、川口軌外(38歳)、小島善太郎(38歳)、児島善三郎(37歳)、中山巖(37歳)、鈴木垂夫(36歳)、里見勝蔵(35歳)、高島達四郎(35歳)、林重義(34歳)、伊藤廉(32歳)、林武(32歳)、福沢一郎(32歳)、三岸好太郎(28歳)という14名の気鋭の画家たちが独立美術協会を設立し、翌年1月には東京府美術館で「第1回独立展」を開催した。初期段階で野口弥太郎、須田國太郎、小林和作、海老原喜之助、鳥海青児らが会員として迎えらる。

第1回展は3,058点、第2回展4,853点、第3回展では5,000点を超える搬入点数があったと記録されており、他の団体を超える「熱狂的な支持」を得ていたことが分かる。

この期に独立は近代史に輝く画家集団として確固たる地位を築き、「独立」は俳句の「季語」になった。

【中期】(1960-1984)

現在の洋画壇でも中心的な活躍を続けている会員が、この頃に新会員となって注目を集め始めた。画壇の芥川賞といわれた安井賞展には、独立所属の画家が多く入選・受賞した。その他昭和会展、安田火災美術財団奨励賞展など多くのコンクールや芸術賞で受賞してきた。また文化庁芸術家在外研修員として選出された画家も多く、活躍が続く。

【現在】(1985-)

独立展以外の活動では、この期も様々なコンクールで受賞したり、文化庁芸術家在外研修員に選ばれる独立所属画家の輩出が続く。また、毎年6月を中心に銀座界隈の画廊で独立展出品者の展覧会が頻繁に開催され、美術界の話題になっている。

一方独立展内部の作品には、抽象作品だけでなく具象作品にも半立体的な作品が現れたり、写実的な傾向の作品やコンピュータを利用した作品も増えて表現がより多様化していった。

独立展は、こうした新しく生まれようとする優れた才能には時を選ばず評価してきた。また「審査することは、同時に審査されること」という自覚を持って運営し、現在にいたる。

批評家・学芸員・会員によるギャラリートークも好評を博している。

『独立ノート』第4号発刊にあたり

独立ノートも、早や4冊目ですか。編集の方たち、ご苦労様です。

このノートを作るきっかけとなったのは、独立の広告費を削ったら、お金が少しできたので、それで広告に代わる広報誌のようなものを作って広く皆様に独立のことを知って頂いたら、と話が進んだのです。

展誌、クロニクルという独立の機関紙とは全く性格の異なることが魅力となって欲しい訳ですから、編集諸氏の勇氣ある自由さを期待します。

ともかく続けて10号辺りまで揃ったところを並べ眺めてみたいものです。取り敢えず、こちらも生き延びて。

事務所委員 今井信吾

《目次》

■独立美術協会小史	表紙裏
■「独立ノート」第4号発刊にあたり 今井信吾	1
■私のターニングポイント 絹谷幸二	2
■このひとに聞く(1) 津川めぐ美	4
■このひとに聞く(2) 松原 潤	5
■つぶやき生の声!	6
■出品者急増の大学から	8
■制作虎の巻	9
■独立展・あところ vol.4 全創立会員	10
■地方展の活動から／神奈川独立の歩み	12
■第82回独立展の地方展／特別展案内	13
■第82回独立展 イベント案内／第83回独立展公募案内	裏表紙

協力：愛知県美術館、大阪市立美術館、京都市美術館、東京都美術館、福岡市美術館
制作：独立編集室・デザイン室 / タイトルネーム：今井信吾
表紙：絹谷幸二『祝・飛龍不二法門』2013年 F200号

私のターニングポイント 絹谷幸二

今回の独立ノート4号のゲストは、絹谷幸二先生です。現在、天満屋創業185周年記念展『輝く日本文化のシンボル』絹谷幸二展（広島店7/23～7/28を皮切りに、全国4会場にて）を開催されています。



インタビュー：この度は、大変お忙しい中、独立ノート4号掲載「私のターニングポイント」の取材にお時間を割いて頂きましてありがとうございます。

絹谷：よろしく願います。さて、私が独立展に初めて出したのは高校1年生の時でした。F100号3点でしたが、キャンパスもドンゴロスを買ってきて自分で作りました。その当時は壁紙というのが運動としてあり、抽象画が非常に勢いのある時でした。惜しくも落選しましたが、それから満を持して大学院1年生の時に再度出品しました。当時、ゴッホ展が京都近代美術館で開かれたりしていましたが、独立という会派は進取の気性に満ちていて、新しい芸術に挑戦しているというイメージがありました。当時『みずゑ』に海老原喜之助先生の雷の絵や、鳥海青児先生のメキシコの石を担ぐ人の絵、林武先生の梳る女の絵などが紹介されており、大変感動しました。そして出すなら独立だと考えるようになりました。そして、もう一つのポイントは、私は奈良の生まれでしたので、子供のころから、東大寺の戒壇院の広目天、新薬師寺の十二神将など、寺の中にキャンパスを持ち込んで絵が描けました。非常に恵まれていたと言えます。子供の頃から素晴らしい芸術に接していたため、ヨーロッパに留学してミロの《ヴィーナス》や《サモトラケのニケ》などの作品を見ても、なんら怯えることなく、のぼせることもなく地に足を付けて勉強出来ました。幸運だったと思います。

ところで、芸大学部の間は公募展に出展できないという規定があり、独立展に出品したくても出せませんでした。卒業制作で大橋賞を受賞し、大学院1年生の時にその勢いで独立に作品を出品して独立賞を受賞しました。次の年、大学院2年生の時に独立賞を頂き、初入選から3年目（副手の1年目）で会員推挙されました。高校1年生から7年位悶々としていましたから、ただポツと初出品したわけではありません。当時は針生鎮朗先生、松本英一郎先生ら、猛者達が独立の先輩としておられましたので、色々和薫陶を受けました。独立では、絵だけではなく、野球をやったり、魚釣りにも良く行きました。芸術の話と共に、人生の楽しい話を沢山して頂きました。しかし、私達の時代は一方安楽の時代でしたので、国の将来などを色々考えながら生活していました。時代に翻弄されながらも、絵描きは絵を描くのが本分だと考えていたもので、そういうところに時間を奪われることなく、いつも絵のことを考えて独立展を中心に人生が回っていました。又、坂本善三先生から「独立を背負って立て」「君しか無い」と言われ、頑張ろうという気持ちになりました。

明治以来、洋画においてはヨーロッパの絵画に触れて、近代化を成し遂げる意志によって日本画に対抗する姿勢がありました。

又、その一方では、戦中、戦後は、ヨーロッパの絵画ではなく、日本の油画を打ち立てなければならないという使命感がありました。私と他の絵描きさんとの少しの違いは、奈良で生まれたことにあります。倭は国のまほろばと言われるだけに、大変深い思索と哲学があります。日本の根幹を作った所に生まれたからか、私1人だけの幸せ以上に「森羅万象を見つめる目を持って」と仏様が神様が教えてくれたように思います。国のことも経済のことも地学のことも人生のことも、森羅万象から人間を見つめ、社会を見つめるという、そういう眼を育むことが出来たと思います。小学校で受けた絵の教育は良かったですね。今の子供たちは放課後すぐ家に帰って塾へ行ったりゲームをしたりしていますが、当時は放課後には図画の先生のアトリエへ行って、そこで絵を描いていました。小学校の時も《ラオコーン》を見たり、先生の制作する姿を眺めていたわけです。小学生でそうでしたから、大学へ進学する時期に大阪の天王寺美術館の地下の美術研究所に通いましたが、石膏像がだんだんと難しくなっていくと何の恐怖感もありませんでした。最初は京都芸大に行こうと思っていたのですが、京都芸大の作品の傾向は非常に調子のかきい絵で、紙に当たる手の圧力をとても柔らかくするんですね。そういうところがちょっと自分には向かないなと感じました。つまり独立展には向かないという気がしたわけです。独立展の絵はもっとぐいぐい描いており、彫刻科のデッサンのような、キャンパスに当たる圧力が非常に強いものに憧れていました。芸大では、神戸生まれの小磯良平先生に学んだのですが、私は小磯先生の様にしゃれた生き方をしていると皆から誤解されているようなのですが、意外と無骨で、聞き入れないところは聞き入れません。色んな先生の話の聞き入れると自分の絵を創造することは出来ません。3年で会員になったので、相当要領がいい人だとも思われていますが、その前に7年間という、蟬と言えば地面の中で這いつくばっていた時間がたっぷりありました。ですから準備期間は凄く長かったということです。

学生時代、島村三七雄先生に連れて行ってもらったと記憶しているのですが、丸の内のギャラリーで目にしたフレスコ画を描くブルーノ・サエッティという作家の絵に非常に感動しました。副手が終わって、留学前にそのサエッティ先生が芸大に教えるにられました。これが僕の運命的な出会いでした。私がイタリア留学の相談をしましたら、先生が「是非来い」と言われてイタリアへ招聘されました。イタリアのヴェネチア・アカデミアという所です。ここで3年間先生について勉強していくのですが、壁画科というのはいわゆる3Kの仕事で、砂を使い、左官をし、どろどろの重い仕事で、手も汚れるし、石灰で肌も荒れますね。私は鈍重でした。当時はフランスやアメリカに行く時代、コンテンポラリーな時代に、フレスコ画、アフレスコと言いますが、古代の壁画を自分も描き、古い模写もし、当時の画法



鐘音の跡 1967年 150.0×200.0cm

で絵を描くということは、よっぽど変わっていないと出来ません。何百年も前の忘れ去られた技法です。しかし、本当に新しいものは古いところにあるという真理があります。そういうものはインス

タントではないですよ。アルタミラの世界やエジプトの絵画に繋がっていますからね。非常に深いものがあるんですよ。技法的にも精神的にも材料的にもね。しかし、そういうものを古典として学ぶというようなことを私はしません。なぜなら、私は現代に生きていますから。修復家の研究所や高松塚古墳の調査員なり、色々としてはいるのですが、修復の勉強の場合は科学者がすることです。それを私がやると、その人たちの仕事を奪うことになってしまいます。ですからしません。模写の勉強などもしましたが、創作者は模写も修復もほんの少しだけ知っていればいいのです。修復の仕事はお金にもなります。又、模写などは、ハマるんですよ。そういう甘い罠は避けて歩かないといけません。



アンセルモ氏の肖像 1973年 81.0×100.0cm

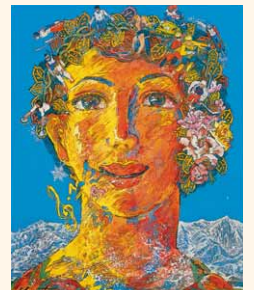
校日本全国回って子供たちに絵を教えます。学校の先生もしていますが、それは長い歴史の中で、私だけでなく色々な人が絵を描くことで文化芸術が広範囲に広がっていくことを願っているからです。もっと言えば、芸術文化が栄えている都市に爆弾は落ちないということです。パリがそうでした。奈良、京都、金沢もそうでした。ベトナムのホーチミン市にも爆撃はありませんでした。つまり人間が創ったものを壊すということはなかなか出来ないということです。

芸術は核を抑止する効果もあるということです。そして又、子供たちに絵を教えるということは、将来、子供たちがどんな方向に進もうとも「絵を描いた時は楽しかったな」ということが頭に残ればいいかなと思っています。又、その他に、例えば東京を不燃化したいという思いがあります。「日本を」と言いたいところですが。私は壁画家ですから、石灰岩（つまりセメント）を扱っています。日本は木の国です。関東大震災のような大きな震災が訪れると、地震の後の火事が怖いですから、東京を不燃化した街づくりをしないといけません。そのため日本強靱化総合研究所代表として今年、日本強靱化法という法律を3本通しました。又、近々では、3.11の時に慌てて外に出ましたが、電柱が倒れてくる可能性に恐怖しました。電柱が倒れれば消防車などが通れません。今、私は無電柱化委員長として電柱をなくそうとしています。共同で行っていることから、事務所のように常に私が張り付いている必要も無く、殆ど時間は奪われません。必要



アンジェラと空II 1976年 193.9×259.1cm

な時に、人に指示を出して執行すればいいわけですから。絵を描くということは存在をつくる、時間をつくるということです。時間は増えますし減ります。時間が終始心がけていることは、絵描きや歌を歌う人、踊る人、詩を書く人、つまり世間的には遊びだと思われている

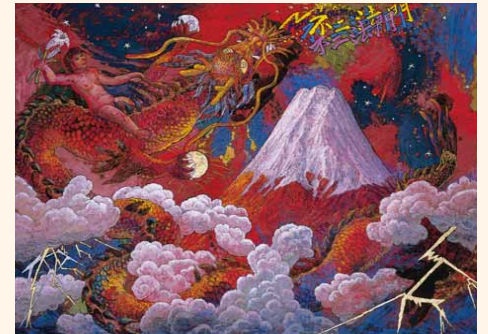


銀鏡の女神(長野冬季五輪ポスター原画) 1997年 91.0×72.8cm

ことをする人は貴族だということです。そういうことが出来なくなるほどアルバイトをしてはいけません。学校の先生も大切ですが、絵を描く力が30%位で300%やれる人は、そういう時間を作ってもいいでしょうね。独立展の出品者の中にも、何年も何年も同じような絵を描いている人がいますよね。そういう人は質的な時間が多岐に渡っていない、つまり自分の絵を模写しているように見えます。独立展の場合は進取の気性に満ち、挑戦している絵でないといけません。新規な時間が生み出されていないということは存在がないということです。絵描きがそのような姿勢に陥ってしまうと、国自体がそうなくなっていきます。なぜなら、絵描きはあらゆる分野で船の触先のような存在だからです。そういう使命があります。近年それが忘れられているように感じます。そうするとマンネリになってしまいます。どのような絵を描いてもよいのですが、挑戦する姿勢をわすれてしまうと独立展は衰退してしまいます。ただ、絵を描くことは楽しいことです。絵も描けない、歌も歌えない、詩も作れないという人は勉強をして大学に行き、就職して人のために一生懸命動めなければいけません。

それと最後になりますが、引きこもりをおそれてはいけません。引きこもりとは絵描きにとって最高のことです。引きこもらなければ絵は描けません。またニートという言葉がありますね。親にお金を出してもらって絵が描けるなんて、条件としては最高じゃないでしょうか。世間で悪いと言われていることは絵描きにとっては良いことになります。そういうチャンスがあればですが、どのような状況にあっても、描くのが苦しくても、その苦しさを楽しまなくてはなりません。絵が売れる、売れないはその時の運ですから、そんなことを気にしてはいけません。それを気にしてしまえば絵描き屋になってしまいます。画商のおもちゃになります。開き直らなければなりません。独立の将来が楽しみです。画友の皆さんのご健闘を祈ります。

[note]



祝・飛龍不二門 2013年 259.9×218.2cm 第81回独立展

このひとに聞く(1) 津川めぐ美



1951 静岡県に生まれる
1971 奈良芸術短期大学卒業
1985 第53回独立展出品 (以降毎年)
1993 個展、銀座スルガ台画廊 (’97、’01、’04)
1996 個展、ELPATIO クラシキ
1997 関西独立展、関西独立賞受賞 (’01)
1998 個展、ギャラリーK/倉敷
2001 第69回独立展 新人賞受賞
2002 上野の森美術館大賞展
第70回独立展 奨励賞受賞
2003 第71回独立展 高品質受賞
2004 第72回独立展 独立賞受賞
2005 第73回独立展 会員推挙
2009 個展、ギャラリー風/銀座
2010 「輝け 独立美術」/日本橋三越 (’11、’12)
その他、グループ展多数

1. 美術を志したきっかけは？

美術を志したとまで言えないのですが、絵を褒められ気をよくして得意科目になったのがきっかけです。絵に興味を持ちはじめたのは小学4年生の担任1先生に出会ったことに始まると思います。子供心をつかむ術が素晴らしく指導力量のある先生でした。音楽も好きでしたが大学は美術系に進路を決め、そのための準備はしたものの受験に失敗、折しも70年安保闘争の真っただ中という時代でしたので親からは浪人という選択肢を与えて貰えず、後で思えばそれもバネになっていたのかもしれない。強い意志を前には出しませんでした。いつか独自の世界観を持って絵画したいと願っていました。諸事情により独立展への出品は遅くなりましたが現在に至っています。

2. 独立展に出品した理由、メリットは？



アウトテイク 162×162cm 1991年

独立展は、短大同期生の張忠儀氏をはじめ数名が学生時代から出品されていたこともあって何度か観に行きましたが、絵のジャンルを問わずとにかくパワーが凄いいと圧倒されています。その頃から「いつか独立展！」と思っ

ておりましたが、出品できたのは何年も経ってからでした。張先生は第45回展で早々と会員となった雲の上の人ですが、私の初入选した会場での再会は嬉しく、ここから何処までできるだろうと思ったものでした。私にとってのメリットは大きな画面に立ち向かえる喜びと言いましたら「何を今さら」と笑われそうですが、自身の存在を問いかける上でラジカルな絵画空間を、独立展の先生方・諸先輩と同じフィールドに展示して戴けるのが有り難いです。そして長年出品するうちに知遇を得た絵のお仲間が私の宝ものです。

Dialogue～空について～ 194×259cm 2011年

3. 美術活動を始めてから現在までどんな変化がありましたか？

(大学を卒業後、制作の変化、経済面など)

幾度目かの転居で倉敷市に居住の頃、現代美術との出会いがありました。作品を直かに観ることで図録では感じるものが出来ない作品との交歓が、それまでの制作を転換させるきっかけとなったのは、丸亀まで瀬戸内の美術館にて度々開催されていた現代美術系の展覧会でした。その頃は転居したばかりで環境はリセット状態、まさに転換期だったのでしょう。私の中に、その企画展で観たタビエスが熱を伴って入り込み、現在の制作に繋がってゆく素材との出会いもこの頃でした。制作の変化は心情の変化とも連動します。当時は、両親介護の閉塞感を見つめ、そのカオスから渾然となるステップを問いかける日々でした。作品のフォルムが何故かタマリなのかと時々訊ねられますが、介護のなかで強烈に焼き付いている或る形にほかならず、それも転換点となる要因でした。両親を見送ってから十年が経ちますが、今では視点を変えてDialogueを仕掛けています。

4. 影響された作品・作家はいますか？

子供の頃からマチスの感覚が好きでした。学生時代に読んだ野間宏「暗い絵」からブリューゲル、ボッスに衝撃を受け、80年代にはキーファー、クッキ、クレメンテ、そしてタビエスとの出会い。最近の旅からは改めて、ピエロ・デッラ・フランチェスカ、フラ・アンジェリコの魅力、ポリフォニーが聞こえるような空気感を再認識しています。等伯、宗達、蕭白。それぞれ影響されたというよりも作品からエネルギーを貰ったと言った方がいいかもしれません。

5. 将来像、今後の希望等を聞かせてください。

最近をよく旅をします。異文化の熱気あふれる街も興味深いですが、淡々と暮らす美しい田舎町、美術・博物館巡り、とりわけ古代遺跡などを歩いてヒトの営みの痕跡に触れるとき、時空を跳んで現在の自分の立ち位置を想います。思い掛けない景観、存在感のある不思議な形態に出会えることも楽しみになっています。今後の希望は特にありませんが、機会ありましたらまた旅に出かけたいと思っています。作品とは、体質もにじみ出る自画像でありますから、対峙して客観的に追いつきながら今後も制作を続け、独立展の壁面に立ち向かって参ります。さて、あと何枚200号が画けるのでしょうか。【note】



このひとに聞く(2) 松原 潤



1959 東京都に生まれる
1983 第51回独立展入選 (東京都美術館・以後毎年)
1984 日本大学芸術学部卒業
1985 個展 (みゆき画廊)
1986 第54回独立展 新人賞
1988 多摩美術大学大学院美術研究科修了
第56回独立展 奨励賞 (’97、’99、’01)
1990 第58回独立展 独立賞
1991 第59回独立展 中山賞
1992 第2回田辺實治大賞展 (’95/日本橋高島屋、倉吉博物館)
1994 個展 (池袋西武)
1997 第3回美の予感展 (日本橋高島屋他)
1998 多摩秀作美術展 佳作賞 (青梅市立美術館)
2001 新世紀を開く美 (日本橋高島屋他)
2002 第70回独立展 会員推挙
2006 SENSATION vol.1 (’07、’08、’10/日本橋高島屋)
2010 個展 (銀座ギャラリー・ムサシ)
2012 独立展80周年記念展 (日本橋三越)
2014 個展 (ギャラリー・セイコウドウ)
その他、個展、グループ展多数

1. 美術を志したきっかけ？

両親が絵を観るのが好きで、幼児期の頃からデパートの企画展などに連れて行ってもらいました。

本棚にあった画集を眺めたりもしましたが自分で描くとなると、その頃昭和40年代はもっぱら新幹線ひかり号とか怪獣とか…夢中になって鉛筆やクレヨンで遊んでいましたね。高度経済成長期の恵まれた世代だと思います。空から爆弾が降ってくることもないですし食べ物にも困りませんでしたし。御近所に二科会の先生が絵画教室を開いておられたので通っていました。「絵描きさんって良いなあ」は先生の影響が大了。その後も予備校で描いた作品など見て頂き、貴重なアドバイスをたくさん受けました。

2. 独立展に出品した理由、メリットは？

大学で独立の先生に指導を受けている中で「公募展って良いなあ」の気持ちが盛り上がって卒業制作を先生には内緒で独立に出して何とか入選しました。後から先生に「出すなら一言いいなさい」と怒られましたね。その後、他大の大学院に行った折にも独立の先生の教室でしたので本当にどっぷり独立です。同世代の出品者でグループ展をしたり意見交換したりと、今も親しい友人は独立関係ばかりです。元気で活発な団体で作家意識もモチベーションも高いので本当に勉強させてもらっています。

3. 美術活動を始めてから現在までどんな変化がありましたか？

(大学卒業後、制作の変化、経済面など)



introduction IV (回帰) 162×162cm 1984年

大学院修了後から都内の中高一貫校で講師をしています。独立の先輩にカルチャーや大学の講師も紹介して頂き何とか描き続けることが出来、自分は恵まれている方だと思います。大学院の頃ですが86年のチェルノブイリ原発事故には衝撃を受けました。目に見えない放射性物質の恐怖、当事国の隠蔽体質など、その頃盛んにマスメディアでとりあげていましたが自分でも調べて行くうちに描かざるを得ないといいますが、花鳥描いても放射能が…と方向転換させられました。今でもそれが根底にあるのですが震災の折の原発事故以降、この国も同じ過ちを犯していることに怖さと怒りを感じます。

4. 影響された作品、作家はいますか？

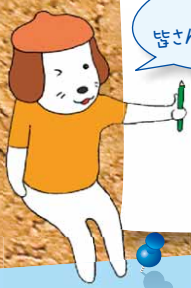
絵画とは別に映画が好きでしたので、中学の時に観た「ローマの休日」と「ベン・ハー」には影響と言いますか憧れがありました。両作品ともウィリアム・ワイラー監督で舞台や撮影場所がローマです。自分のローマ好きはこの頃から刷り込まれているようです。最近義父母の演劇を観近で観る機会も多いので舞台の面白さ、奥深さに目覚めました。もちろん独立の先輩方の作品は安井賞などでも輝いていたので大きな影響を受けました。ダ・ビンチやラファエロ、ラファエル前派の何人かの作家、ブーグローなど写実を超えた域の仕事にはいつも感化されています。

5. 将来像、今後の希望等を聞かせてください。

恩師の言葉に「絵(芸術)は世界を変えられる」という名言があります。正にそう、そうあるべきと信じています。宗教、民族の違いで紛争になるのは辛いことです。経済優先の大きな力に押し流されないようにしっかりと見極めなければならないことだらけ、の世の中ですが、芸術に携わる人間が提示出来る価値観、理想の姿がある筈です。自分がヨーロッパの教会などで感じた、歴史や経緯とは別に「良いものは共有出来る」「つながってる」という素直な感動もそれと同義です。教職の現場で見る子供達の目の輝き、興味の対象は今も昔も何ら変わっていることはありません。大人が子供を育む、子供は消費者ではない、真の豊かさを目指すということを念頭に教育現場でもアトリエでも頑張ろうと思います。【note】



La Speranza～祈りの譜 194×259cm 2013年



どっくんです。
皆さん実感もってるな～

つぶやき生の声！

今年も独立展に先立って、会員・準会員・会友・一般出品者多数が東京都内始め、全国各所で展覧会を開催されました。制作活動からにじみだされる言葉はどれも説得力がありますね。その作家の人となりを知るヒントとして、お読みいただければ幸いです。

●個展は体には悪いが頭にはいい。若い頃はのやり方で天下が取れるかと考えながら制作していた。
(S.I・神奈川県)

●影をずっと描いてきた。光を描こうとした頃、光画廊と出会った。運命的な出会い。
(田井 淳・石川県)

●出来上がり間際って、ふと、これでイイのか？って頭を過ぎる？そういう時は思い切り大きな声でバカボンを唱えます。
♪これで～いいのだ～これで～いいのだ～
(大久保 宏美・神奈川県)

●あーまた違うモチーフで描いてしまった。やっぱり浮気性かな！昆虫・面・猫・女性・滝・富士山・花鳥画・蛇・馬・魚介…まだ描いてないものないかな？
(伊藤 清和・画廊 宮坂)

●勉強の場。よく夢を観る。怖い夢などイメージして半抽象を表現している。
(遠山 隆義・北海道)

●制作において身体活動から直感的に掘り込んでいく。練習は波の強弱をもたせ毎日行い感覚を大事にしている。夏は天空まで滝が続くような沢をよじ登ることもあり、ドラマチックだ。
(殿村 優介・神奈川県)

●かなり山奥の古民家の蔵で個展を開催した。好きな色の集まり、形、質感、季節の中に作品を置いてみたいとの想いがあった。街中の画廊とは異なり、展示はインсталレーションに変貌。お陰で「抽象の説明」をせずに済んだ。山里は最先端！とわがままに呟いた。
(北島 治樹・ギャラリー安政)

●学びの場。富とかはどうでもよく技術を盗んで盗んで盗みまくる場所。そして学んで学んで外に出す。
(高松 和樹・宮城県)

●天井が高いと色々な事を考えるには視野が広がって良い！…と建物メーカーのCMで言っていた。良かった！狭いけれど、天井が高いアトリエを造って！…あとは絵を頑張るだけ！…そこが肝心！
(早矢仕 素子・東京)

●自然が作り出した造形物にハッとすることがある。例えば、流木。波や風雨にさらされ、虫に喰われ、長い旅を経て出会うことができた奇跡。イメージーションを刺激し、私を制作へと駆り立てるのだ。
(阿部 龍一・岩手県)

●独立とは、作家としての「気合」と「根性」を学ぶ場でもあると思います。厳しい講評を頂ければ頂くほど僕は燃えてきます。もしかしらたらただのDMかもしれません。
(石川 純一郎・埼玉県)

●夜は9時には寝る。そして朝は4時頃には起きている。夜に制作してあまり上手く行った覚えがなく、朝制作の方が性に合っているらしい。夜寝る事と朝寝る事は全く違うからだと思う。
(I.M・京都府)

●ステッドラー、ファーマーカステル、カラダッシュなども使いますが、人物の鉛筆デッサンでは、ハイユニヤンボモノ100を中心に使用。やや、日本製の鉛筆は軟らかい印象で、濃い色は出しやすい。
(中村 光幸・香川県)

●現代美術にはそれを読み解く文脈が必要といわれている。世の中の出来事もきつとある種の文脈の上に可視化されているのだろう。でも七転八倒、右往左往の毎日。「私は嘘つきだ」と本質を隠しながら過ごしている今日。もっと勉強せねば…。
(安藤 和世・北海道)

●座右の銘…一生勉強 です。自分に「まだまだ！」と言い聞かせて生きていますが、絡まってる皆様、関わっちゃってる皆様、まだまだこれから長きに渡ってお願いします。
(青山 美穂・ギャラリー向日葵)

●独立大学。勉強の場。それぞれ自由な独特な作風があり、自分は合わないと言われつつも自分の絵柄を追求していきたくと思った。独立は鍛えられる。独立が大好き。
(岡林 まち子・三重県)

●毎回みなさんの熱気あふれる作品を見る度、日々の仕事に忙殺されながらも必死に絵筆をとっているのは自分だけではないんだと思ひ、また地元に帰ってからの制作に励むパワーをいただいています。
(河合 規仁・東京銀座画廊)

●伊東茂広先生より「隠し釘」というのを教えていただいたから、パネル作りが楽しくなりました！うまく出来るという絵が描けそう…！？
(東田 理佐・REIJINSYAギャラリー)

●歌を歌う事と絵を描く事は共に体力勝負です。お互いが良い相乗効果を生んでくれているようです。最近年齢的につらくなってきたのですが、体力の続く限りは頑張っていきたいと思っています。
(内藤 千鶴子・京都府)

●関西の人間なので登壇は開車とのつながりが少ない。第一線で活躍してる先生方とお会いしてお話が出来るので見識が広がり、自分のやっていくことがはっきり見えてくる。
(土井 久幸・東京銀座画廊)

●名古屋在住、山田俊彦、生まれも育ちも名古屋。出品してからいつも思いを感じていることですが、名古屋からの出品者は自分一人だけなのです。大いなる田舎なるゆえんか？そんなことは洒落にもなりません。
(山田 俊彦・愛知県)

●網膜剥離の手術の後、今度は盲腸で入院してしまいました。いろいろ今年はあるようですが、個展の時には大丈夫でしたので運がいいのかも知れません。
(M.M・兵庫県)

●最近、京都を俯瞰で描いているのですが、その取材を兼ねて空中散歩。八尾空港からヘリコプターをチャーターして京都上空をまわっていました。
(坂田 幸雅・京都府)

●今更に、モノを作ると結構なプレッシャーと戦うんだなあと、今回の東京個展で特に思いました。
(田中 孝林・熊本県)

●カンヴァスF130・S100・F100の3枚、袋張りした。久しぶりにまとめて張ったら草臥れました。雑用に追われていましたが、やっと着手できるという思いがあったせいか、やはりうれしい。
(吉岡 友次郎・神奈川県)

●独立は色々な先生が親切で居心地の良い場所。様々なジャンルの作品が観られて刺激になる。又、飲み会がたくさんあって遅くまで付き合ってくれる会員の先生が大勢いてとても楽しい。
(宮地 明人・東京銀座画廊)

●第25回展の初入選が30号の人物画。札幌の教員に就職決定した昔である。以後入落を繰り返して、65年間の月日は流れた。巨大な独立の力強さにやっと対応して、来年は米寿になる。絵の深さ広さ強さと魔物に引かれて。
(米谷 哲夫・時計台ギャラリー)

●絵を描くという事は「業」だと思っています。絵画には自分の生き方が出ると言う。描くことで今の自分はこうなんだと気がつかされ出来上がった作品を観てハッとすると。真の自分を見つけることができる。
(T.Y・神奈川県)

●5回目の個展でした。回を重ねてもモチーフが変わっても根本的な問題点が解消されていない事が判明！愕然としていたら試作が足りないから同じ事を繰り返して抜け出せない、と助言を頂き納得してしまっ！
(片山 紘子・熊本県)

●社会人になって急に絵を描きにくくなった。損保会社のお客様に絵描きさんが。思い切った生徒に。県展からなんと独立出品。高校までバレーボールしてた自分がもうすっかり文化部。
(佐藤 めぐみ・秋田県)

●犬と猫が居る一番の年長が17歳。冬に体調を崩しダメかと思っただけで介抱したら蘇り。この夏は熱中症にならないように2時間ごとに水をやり扇風機をあてて機嫌よう乗り切り。今の調子だと制作や上京にも影響なさそう。
(藤田 敏美・大阪府)

●東京国立博物館・東洋館の「上海博物館 中国絵画の至宝」展で見た王翬、王蒙、すごいですねえ。元時代の絵画。それに、郭熙も。やっぱり、玉壁いい。勉強になりました。
(山田 啓貴・東京)

●20年前に佐原先生に会い、そこから私の人生が変わり佐原先生のご指導のもとに準会員にさせていただきます。今年からモチーフも変えたので新たに頑張っていきたい。
(野崎 廣・あかね画廊)

りっちゃんです。
制作の参考になりませう。
またよろしくね。

★制作していると、いろんな思いや考えが心に浮かびますよね。いろいろな生の声をまた送ってネ。おまちしてませう。



制作虎の巻

制作のために大事にしている工夫や技術、独立の作家達からそんな「秘技」をこっそり教えていただきました。

偶然性を活かす

壁にびっしり生えてい

る葛や若肌の複雑な表

情等を表現する時に、

一つ一つ描くだけでは

単調になりやすい。そ

こで色を塗った後で皺

を寄せた布などを押し

付けて痕を付けたら、

絵の具を染み込ませて

スタンブのように叩い

たりして複雑なニュア

ンスを作る。そこから

形を拾い上げて描き込

みの糸口としてリアリ

ティーのある表現にし

ていく。

(会員・男性)

体を動かせ!

絵に向かっているどっ

と体が縮こまり固まっ

てしまうので、絵から

離れて眺める度にスト

レッチや簡単な筋トレ

をして体を活性化させ

てまた絵に向かう。

(会員・男性)



違う絵と見比べる

仕上げ段階に入った時

に自分の過去の作品と

見比べる人は多いと思

いますが、私は完成度

を把握するためにあえ

て自分の絵とは全然違

うタイプの絵と見比べ

ます。権藤先生の絵の

写真を壁に張って見比

べていました。(告白笑

い)

(会員・女性)

天然の毛の筆を 使うべし!

特に柔らかい毛の筆は

天然のものを使うべき。

天然毛は使い込んでい

くうちに少しずつ摩耗

していくので、太目の

ものでも徐々に細くな

り最後まで使えます。

合成のものは使ううち

に先端が伸びて外反し

てしまいます。値段の

差は当然ありますが、

高ければそれだけ大事

に使うので結局お得と

思います。

(会員・男性)

新聞のチラシで エスキース

構図や構成を決める時

に新聞のいろんな色の

チラシを自由に切り抜

いて、床にばらまいて

動かしてみよう。思い

がけない面白い形や動き

が見つかると。

(会員・男性)

ネタ帳を持ち歩く

気になったワードや閃

いたことを書き留めま

す。そこからイメージ

が湧いて来ることがあ

るしさいなことが広が

がっていくこともあり

ます。大袈裟なこと

ではなく身近な小さな事

柄でも絵になる要素は

充分含まれていると思

います。

(会員・女性)

ウエスを活用する

ウエス(ボロ布)をた

だ汚れを拭き取るため

だけに、絵の具を

取りながら描く道具と

して使います。アクリ

ル絵の具を使っている

ので汚れたら水に浸し

ておいて絞ると、使っ

た回数によっていろん

な堅さのウエスが出来

ます。それを筆と同様

に使い分けています。

(準会員・男性)

——学生の学外での活動はどのような状況でしょうか?また、それに対してどういう指導をされているのでしょうか?



石原由惟「内ー1」

【金子】図画工作、美術・工芸の授業で求められているものは、美術の専門教育というより美術による教育です。しかし、図画工作科教育法・美術科教育法の学びを強化するには、美術本体の歴史、材料・技法等の教材論を含めた深い知見がなければ知識・方法論だけの浅いものになってしまいます。

ですから、学外の実験美術展に出品し、自ら創造する行為を実体験しながら学ぶことを奨励しています。洋画研究室の学生は、指導者が独立会員ということもありましたが、昨年度の活動は独立展(27名)が多く、次に女流画家協会展(11名)です。また、その他の公募展・コンクール展等に出品し入選・受賞をしました。

【山田】大学が山形にあることから、美術の世界と接する機会が少ないということは否めませんが、自分自身をしっかりと見つめて落ち着いて制作をすることが出来る環境であり、独自の表現を模索しながら身につけていくよい時間空間でもあります。その4年間の成果として、美術科全体で東京都美術館においての卒業制作選抜展をおこない、美術関係者や画廊関係者と接する機会を設け、自分と社会との関係を意識させる指導をしています。そんな中、多くの学生はコンクールに出品しており、昨年はシェル賞展で2席、VOCA展では大賞を受賞する学生も出てきています。公募団体展へは、芸工大も同様、指導者が独立と二紀ということからこの二つが多く、合わせて15名の学生が昨年出品しました。

——最後に、独立で頑張っている卒業生をご紹介ください。

【金子】最近の卒業・修了者では、準会員の児玉沙矢華と白藤さえ子が頑張ってくれています。彼女らの存在が在校生に良い刺激を与えているのではないのでしょうか。

【山田】一番目立っているのは昨年会員になった、高松和樹ですね。あと、学部3年生で新人賞を受賞した石原由惟がいます。この勢いに後輩たちが続いていくことを願っています。[note]



高松和樹「ヨリドコロ」

出品者急増の大学から

ここ数年の独立展では、東京学芸大学と東北芸術工科大学の学生と卒業生の活躍が目立つようになってきました。そこで、両大学の指導者の方に大学の様子をお聞きしました。

- ・東京学芸大学名誉教授 金子 亨 先生
- ・東北芸術工科大学教授 山田 修市 先生(敬称以下略)

——大学での実技の授業はどうなっているのでしょうか?

【金子】学芸大は教育学部のため、たとえ洋画研究室に所属する学生であっても、教員免許取得のための授業をたくさん受講しなくてはなりません。将来、小・中・高等学校の教員として図工、美術を教えるためには美術に関する広い見識と実技力が必要ですので、実技に関してだけでも、絵画の授業の他に彫刻もデザインも学ばなくてはなりません。授業として洋画制作をする時間は多くはないですが、「造形美術演習」(90分×1コマ)という授業では1~3年生の学生が同じ時間帯に作品制作をおこなっており、学生達は互いに刺激しあい、講義の空き時間や夏休み等に30号~100号の授業課題に取り組んでいます。



児玉沙矢華「微睡む嘘」

【山田】洋画コースの学生は、1年次に週3日90分×2コマ、2~4年次は週4日90分×2コマの実技の授業が確保されています。その中で版画、塑像、写真等、様々な授業を受けています。3年次に4週間で100点以上のドローイング制作から、プレゼンをおこなう課題を経て、まとめとして100号程度の大作制作をおこないます。4年次ではこれまで培ってきた自己のテーマ、表現方法を総動員して作品制作をおこなっていきます。卒業制作作品の大きさは展示可能であれば制限はありません。毎年幅6メートルを超える作品を制作する学生が何人かおられます。大作を全力で描き上げることで人間的にも成長し、表現力も格段につきます。



白藤さえ子「狂喜の、歌声」

独立展・あのこと vol.4

～独立美術協会創立会員・4つのエピソード～

少しでも、14名の作家像を掴みきつかりけりして頂ければ幸いです。

- 伊藤 廉：理知的で静謐な世界
- 鈴木 保徳：郷土派の詩人画家
- 川口 軌外：幻想と抽象的表現
- 高島達四郎：素朴な心の巨匠
- 小島善太郎：素朴で温和な色彩
- 中山 巍：優しく清爽な色彩
- 児島善三郎：豪放華麗な様式美
- 林 重義：日本的純写実主義
- 里見 勝蔵：フォーク精神を貫く
- 林 武：綿密な構成と大胆さ
- 清水 登之：哀愁とユーモアの心
- 福沢 一郎：前衛運動の牽引者
- 鈴木 亜夫：簡潔な形と強い色彩
- 三岸好太郎：夭折のモダニスト

伊藤 廉 いとうれん(きよし) 1898-1983

愛知県出身。父は医師。本郷絵画研究所。東京美学校卒。1927-'30年、渡仏。ルオーに師事。二科賞受賞。'37-'73年、国画会会員。東京芸術大学、愛知芸術大学教授。名古屋で肺炎により死去(84歳)。



■現、愛知県立旭丘高校で、文学、美術にめざめる。一級上に、佐分真がいた。小説家・菊池寛とも交友を持つ。■佐分は、敷地400坪にアトリエ(東京都北区)を建てた光風会会員で、39歳で絶死。芸大講師の伊藤がここに住む。■50代前半の2年間、生死の境をさまよう大病で入院。その費用は、著書『絵の生活』の収入が助けとなった。■芸大『伊藤教室』出身者は、笠井誠一、中村清治、佐々木豊、島田章三、柏健、森本草介、安徳瑛などいる。

川口軌外 かわぐちきがい 1892-1966

和歌山県出身。11歳で家督を継ぐ。現・和歌山大中退。太平洋画会研究所。安井曾太郎に私淑。渡仏。レジェやシャガールに学ぶ。二科会会友を辞す。1947-'61年、国画会会員。脳軟化症で死去(73歳)。



■父が55歳の時の子で、孫太郎と命名。師範学校を出て教師になるというコースを外れ、「軌外」と号する。■安井曾太郎から里見を紹介され、里見がパリにやって来た時には出迎えた。■東京出身の長男・京村の後に、パリで次男の巴里村が生まれたが、生後20余日で死亡してしまう。■小説『放浪記』で有名な林美英子は、軌外のことを「素朴なひとで、長い間外国にいた人とも思えないほど、しっかりと日本風に落ちついた人」と書いた。

小島善太郎 こじま ぜんたろう 1892-1984

東京都新宿区出身。太平洋画会、葵橋洋画研究所。安井曾太郎に師事。渡仏。1930年協会、独立展創立会員。二科会会友を辞す。日本美術学校、東京純心学園短期大学教授。東京で心不全により死去(91歳)。



■中村彝、安井曾太郎、春陽会の萬や円鳥会、「パリの豚児」の前田や佐伯、二科会、1930年協会…と他の創立会員とほぼ全て共通項を持ち、独立展の要的存在。■絵が上手くいいかいて捨ててくる癖があったが、佐伯がパリで拾って日本に帰った時、本人に手渡した。■印象派の画家たちがよく使う、パレットの絵具の配列をかたくなに守った。■名前を間違えられることが多いので、小島が「Z.Kojima」、児島は「Z.Z.Kojima」とサインをしていた。

児島善三郎 こじま ぜんざぶろう 1893-1962

福岡県出身。実家は、紙問屋。美校受験失敗、以後独学。野口弥太郎や林武と親交。円鳥会出品。1925-'28年、渡仏。二科会会員を辞す。日本の油絵を目指す。千葉の病院で肝臓癌により死去(69歳)。



■父が9代当主であった児島家は、350年続く商家で、九州一と言われた紙問屋。元は岡山県南端児島半島に暮らした武士の家系。■家出して上京すると、画家には反対だった父親が姉の名で送金した。■アトリエでは椅子に座布団を敷き、そこに正座して描いた。戸外での写生では妻がいつも付き添い、強風の日にはキャンバスを支え、日照りの時には日傘をさした。■親しく交友した野口弥太郎、林武とで『独立展の三羽鳥』と呼ばれた。

里見勝蔵 さとみ かつぞう 1895-1981

京都府出身。父は医師。関西美術院。東京美学校卒。1921年、渡仏。プラマンに師事。1930年協会設立。二科会会員を辞す。'54年、国画会会員。写真壇設立。鎌倉山の自宅で心筋梗塞により死去(85歳)。



■里見は、現・大丸京都店敷地内に生まれた。昔は近隣に円山応挙が住み、当時は安井曾太郎や梅原龍三郎の家も近所だった。■大学を卒業した頃、佐伯祐三が里見を兄事し、2人でバイオリンを弾いた。■渡仏中、ゴッホの墓に植えた向日葵の種を日本の美術誌読者に配布して、熱心なゴッホファンを喜ばせた。■近所に住んでいた三岸を創立会員として勧誘しに行き、後には川口と共に、須田國太郎と小林和作を新会員に勧誘した。

清水登之 しみず とし 1887-1945

栃木県出身。成城学校卒。1912年、渡米。ニューヨークでジョン・スローンに学ぶ。'24-'27年、渡仏。二科展で、樗牛賞、二科賞受賞。'45年、栃木の実家で、急性白血病のため死去(58歳)。



■300年間19代続いた大地主の家に育ち、裕福な子供時代を送るが、父の代で没落。中学で描いたビスマルクの肖像画が明治天皇に献上された。■渡米中、古康雄、石垣栄太郎、野田英夫、北川民治を知る。■ニューヨークで生まれた長男・育夫と川口軌外の長男・京村は、パリのルクサンブル公園でよく遊ぶ仲だった。■毎朝、戦死した育夫の肖像画を描き、美大の教授へ行くのが日課だった。半年後、「育夫像」(絶筆、P12号)が残された。

鈴木亜夫 すずき つくお(つぎお) 1894-1984

大阪府出身。葵橋洋画研究所。東京美学校卒。中央美術賞受賞。円鳥会出品。二科会会友を辞す。戦争記録画を制作。1966年、渡欧。武蔵野美術大学教授。東京都調布の自宅で老衰のため死去(90歳)。



■1922年、小島善太郎が横浜からパリへ向けて出港する。それを美校同級の前田寛治と見送った。■母校、現・芝学園の講師となる。真面目な性格から、生徒に赤鬼先生と呼ばれた。■'27年、林重義、清水、伊藤、古賀春江、野間仁根らと新団体設立に向けて行動をした。1930年協会の会員の勧誘に努めるが、前田は応じなかった。突然、古賀や野間が抜けて、この会は消滅。■小島善太郎の死から4ヶ月後、創立会員の最後の人として死去した。

鈴木保徳 すずき やすのり 1891-1974

東京都大田区出身。白馬会研究所。東京美学校卒。二科賞受賞。二科会会友を辞す。中国へ取材旅行をする。国立近代美術館収蔵。紺綬褒章受賞。多摩美術大学教授。東京の自宅で胃癌のため死去(83歳)。



■海城中学校卒業。現・海城高校の卒業生に、窪島誠一郎(信濃デッサン館と無言館設立者、美術評論家)がいる。■関東大震災の前後、動物植物研究や音楽研究を行う。生来の生物(特に昆虫)好きから、生物学に進もうと悩んだ。■1935年、清水登之、福沢一郎と満州(現・中国東北部)に渡る。3人展を新京やハルビンでも開催し、満蒙素描集を出版。■横浜の多くの画家達の面倒を非常に良くみて育成し、横浜洋画のルーツとも称される。

高島達四郎 たかばたけ たつしろう 1895-1976

東京都神田出身。家業は雑穀問屋。慶應大中退。本郷洋画研究所。1921年、渡仏。国画会会友を辞す。毎日美術賞、旭日中綬章受賞。東京芸術大学講師、武蔵野美術大学教授。心筋梗塞で死去(80歳)。



■小学校の同窓に美術評論家の福島繁太郎、岩崎彦弥太(三菱創業者の弥太郎の孫)らが、中・高校の先輩には永井荷風、藤田嗣治、岸田劉生らがいた。■藤田嗣治は自分の死の半月前、療養先のスイスから電話して来て、最後の別れを告げた。■谷崎潤一郎や白洲正子と親交。荷風には結局会えなかったが、今は伝通院にお互いの墓所がある。■林武、野口弥太郎と並ぶ『3大巨匠』の一人といわれた。息子・正明は、仏文学者で慶応大教授。

中山 巍 なかやまた かし 1893-1978

岡山県出身。父は、岡山市長。葵橋洋画研究所。東京美学校卒。第1回帝展入選。渡仏。プラマンに師事。二科会会友を辞す。日本芸術院賞受賞。女子美術大学教授。東京の自宅で老衰により死去(84歳)。



■上京して間もなく脚気になり、1年間郷里で過ごす。大学4年次に、肋膜炎で半年間休学し留年。■渡仏中、ロルヌ街にアトリエを移す。隣に高島、その隣へ福沢が来る。■帰国後直ぐにパリで佐伯が死んだことを知り、里見、小島、前田と新宿の豊隆亭で、30歳で逝った友を惜しみ献杯した。■晩年、脳出血で左半身不随となる。この年、独立展に出品せず、美大の教授も辞す。その後、10m幅の大壁画を描き、独立展に作品を19回出品した。

林 重義 はやし じげよし 1896-1944

兵庫県出身。日本画から洋画へ転向。関西美術院。中央美術展会員。二科展二科賞受賞。渡仏。二科会会友を辞す。1930年、二科展で特陳。'37年、独立展脱退。'42年、国画会会員。胃癌で死去(享年47歳)。



■小林和作と渡欧。パリでは、伊藤と行動を共にして、北野中学の後輩・佐伯祐三の制作を2人で後から覗いた。■パリで、佐伯の仮埋葬の折、木下孝則、木下義謙、山口長男、荻須高徳らと参列。帰国前、未だ消えない新美術団体設立の夢を伊藤に話した。■1935年、川口、伊藤と京都朝日会館壁面に25㎡の大壁画を制作。■30代半ばからアルコール中毒で入院を繰返し、妻と次男を相次いで亡くす。戦前、神戸画壇の中心的存在。

林 武 はやし たけし 本名：武臣 1896-1975

東京都千代田区出身。早稲田実業学校、東京歯医学校、日本美術学校退学。二科会会友を辞す。1930年協会。東京芸術大学教授。日本芸術院賞、文化勲章、従三位叙勲受賞。肝臓癌で死去(79歳)。



■曾祖父は、本居宣長の高弟といわれ、曾祖父、祖父、父と3代にわたる国学者の家系。■小学校では東郷青児と同級生だった。20代の初めには、人の描いた「ペンキ絵」と称する絵を売り歩いて生活費を稼いだ。■1922年、二科京都会巡回展の折、林の二科賞受賞作品を小林和作が感動して購入した。■芸大『林武教室』出身者は、福本章、針生鎮郎、松本英一郎、林敏二、工藤哲巳、奥谷博、竹内晟、寺島穰、湯澤正臣、齋藤研、今井信吾、馬越陽子など。

福沢一郎 ふくざわ いちろう 1898-1992

群馬県出身。父は、富岡町長。東大中退。渡仏。独立展脱退し、美術文化協会結成。多摩美術大学客員教授、女子美術大学教授。芸術選奨文部大臣賞、毎日美術賞、文化勲章受賞。肺炎で死去(94歳)。



■仙台の二高(現・東北大学)3年の時、芸術の道を考える。母に説得され、現・東京大学に入学。■谷中の下宿から、大学より近くの朝倉文夫の塾で彫刻を学び、後にパリで出迎えてくれた佐伯祐三と交友する。■1922年、本郷動坂町にアトリエと収入用の借家を建てる。関東大震災後、渡仏を考え、劇作家の岸田國士に仏語を学ぶ。■福沢が紹介したシュルレアリスムは熱狂的に受け入れられ、独立美術協会から100人程の若手を連れて脱会した。

三岸好太郎 みぎし こうたろう 1903-1934

北海道出身。独学。中央美術展入選。春陽会賞受賞。麗人社結成。1926年、春陽会無鑑査推薦。最年少の独立展創立会員。名古屋の旅館で持病の胃潰瘍から吐血をし、心臓発作の併発で死去(31歳)。



■父の死後、異父兄の子母沢寛(著書：新選組始末記、他)宅に、一時下宿する。■現・女子美大生の節子を描き、春陽展入選。関東大震災直後、節子の下宿へ駆けつけプロポーズ。■時には1週間足らずで、大作を仕上げる才能を発揮。■「巴里：パコ」と呼んでいた長男を生まれてから4年間も無戸籍のまま、好太郎は死去。慌てた節子は「黄太郎」と届け出た。未完のアトリエ(中野区)も節子が完成させ、2014年に国の登録有形文化財となる。

[note]

【参考文献】

- 「三岸好太郎 昭和洋画史への序章」 匠秀夫著 平成4年 求龍堂
- 「白いチューブの魅惑」 高島達四郎著 昭和58年 新潮社
- 「林武展」図録年譜 牟田行秀・石井亜矢子編 1996年 毎日新聞社
- 「特別展調布の美術 鈴木亜夫・画業と作品」 平成2年 調布市郷土博物館
- 「佐伯祐三 一下落合の風景」 平成22年 新宿歴史博物館
- 「中山巍回顧展」 略年譜(高倉達夫編)昭和54年 財団法人富士美術館
- 「前田寛治」 瀧俣三著 昭和52年 日動出版
- 1930年協会・独立美術協会による「近代洋画の歩み」展 1983年 朝日新聞社
- 「独立美術協会80年史」 2012年 独立美術協会 他

地方展の活動から

★神奈川独立の歩み★



神奈川を語る時、やはり中心は横浜にあり、安政の開港により発展してきた外国文化の影響が濃厚な土地であることが特徴です。

芸術の面では、鎌倉近代美術館・横須賀美術館・茅ヶ崎市美術館・横浜市民ギャラリー等、ここを活躍の場として多くの作家が輩出されています。

神奈川独立の歴史をふり返ると、昭和の初め、当時、横浜にあった独立研究所で創立会員の鈴木保徳先生が中心となって、多くの作家を指導されていた記録があります。岡村芳男・斑目秀雄・鉄指公蔵・森兵五先生等が、この研究所より輩出されています。

戦後になって、昭和30年頃から、20名程度の有志により独立グループ展が開催され、昭和37年のグループ展には当時、九州から逗子に移られた海老原喜之助先生も会場に来られ、松島一郎先生と共に指導にあたられたと伝えられています。その後、横浜でのグループ展は小規模なものは何度かあった様ですが、昭和40年頃になると若い独立の作家も多く集まる様になり、横浜で開かれたグループ展をきっかけに1976年、新生、神奈川独立展が22名の出品者により、横浜市民ギャラリーで開催されました。この第1回独立展開催にあたっては、永年にわたり独立の事務所を担当してこられた故・森兵五先生の大いなる尽力があったの誕生と深く感謝しております。

1976年第1回展を開催した神奈川独立も今年で38回展となりました。当初、22名だった出品者も60名以上となり86年には第10回記念展も開かれ、第18回展からは横浜で永年後進の指導にあたられた故・志村計介先生の功績をたたえ、志村計介記念賞も設立されました。第1回の志村賞は大久保宏美さんが受賞されています。2011年の第35回記念展からは志村賞に代わり新たに森兵五記念賞が設けられました。

初めに神奈川の中心は横浜であると記しましたが、実は神奈川県は非常に変化に富んだ風土と文化をもった県とも言

えます。

多摩川の流れを境に大都市東京と隣接し、東海道を西に行くと温暖な気候の静岡県と接し、丹沢山系に囲まれた広大な山林と農耕地に恵まれた県でもあります。

歴史と文化の都、古都・鎌倉や、気候に恵まれた湘南・小田原、軍港として栄えた横須賀、漁業の街・三浦崎と、古くから文人や画家に愛された町がそこにあります。現在神



志村計介《南仙せいべい》制作年不明

奈川在住の独立会員も15名と東京に次ぐ多くの作家の制作の拠点となっています。今年で38回を迎えた神奈川独立ですが、その間に設けられた志村計介記念賞、その後の森兵五記念賞

のお二人の先生について少し触れておきたいと思います。

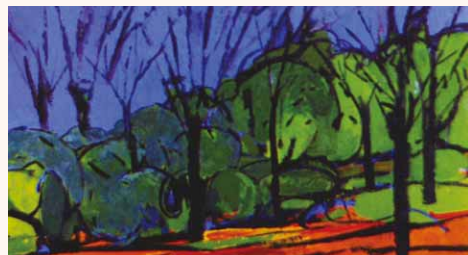
志村計介先生は第16回独立展（1948年）に会員になられ、若い頃より高島達四郎先生の研究塾で学ばれ、重厚で気品に満ちた作風で知られていました。若手に対する指導も極めて丁寧で温厚なお人柄が滲み出た講評内容で、逆に甘い作品には鋭く厳しい指摘をされる先生でもありました。一方、森兵五先生は金沢文庫にある大きな屋敷にお住まいで、性格も豪放で行動的、ハイカラな自由人の気概がありました。休日など、大型バイクに跨り横浜の街を颯爽と走っていたものでした。

酒豪で知られる先生は、毎年神奈川独立展初日には会場に来られて後進の指導にあたられていましたが、初日の朝、神奈川独立展の招待作品を借り受けにお伺いすると、私を広い玄関に招き入れ、「やー、わざわざ御苦労さま」と言って、二合は入るかと思われるグラスのコップに日本酒をなみなみと注いでくれる変わった歓迎ぶりの先生でした。私が電車に乗って朝の横浜市民ギャラリーに着く頃には、顔面赤鬼のごとくで出品者の囂聲をかったものでした。

今年で38回を迎えた神奈川独立ですが、この会の特色は神奈川県のみにならず、近県どこからでも自由な意思で出品可能な制度になっていることです。作品発表の場というよりも勉強会としての形、内容が浸透してきています。

2年後の40回記念展に向けて、制作の熱気が益々伝わってくる今日、この頃です。

[note]



森 兵五《森林公園》(絶筆) 1989年

第82回独立展の地方展/特別展案内 (会期等変更もございます。詳細はHPでご確認ください。)

大阪展

2014年11月11日(火)～11月16日(日)
大阪市立美術館／天王寺区茶臼山1-82



京都展

2014年11月27日(木)～12月7日(日)
京都市美術館／左京区岡崎円勝寺町124



福岡展

2015年3月3日(火)～3月8日(日)
福岡市美術館／中央区大濠公園1-6



名古屋展

2015年3月17日(火)～3月22日(日)
愛知県美術館／名古屋市東区東桜1-13-2



独立春季新人選抜展

2015年4月1日(水)～4月5日(日) (入場14:30迄)
東京都美術館／台東区上野公園8-36



【編集後記】

独立ノートは、独立美術協会に関してもっと多くの方に感心を持って頂くための一助として生まれました。それも今回で第4号となり、何とか定着してきた感があります。我々の独立展への思いが、この『独立ノート』を通して少しでも伝わればと念じております。今年の夏は全国で集中豪雨がおこり、土砂災害による大きな被害が出ました。最後に、亡くなられた方に哀悼の意を表しますとともに、被災された方には衷心よりお見舞い申し上げます。(編集室)

【独立編集室】

大泉佳広／高澤哲明／高橋雅史／塚本 聡／花澤洋太
松村浩之／目黒礼子／山本雄三／輪島進一

【独立デザイン室】

五十里雅子／大久保宏美／大場再生／奥谷太一／中嶋 明
浜松繁雄／早矢仕素子／廣田政生

[note]

第82回独立展 (2014年10月15日(水)～27日(日))

イベント案内

日	時	内 容	場 所
15(水)	13:30-14:30	独立美術協会会員による批評会	独立展会場 2・3階展示室
	18:00-20:00	表彰式・懇親会	東京會館 千代田区丸の内3-2-1 TEL.03-3215-2111
16(木)	14:00-15:00	🚩 ギャラリーツアー	独立展会場 第1室～
	16:00-17:00	係の会員が1日2回、独立展をご案内します。	
17(金)	14:00-15:00	🚩 ギャラリーツアー	独立展会場 第1室～
	16:00-17:00	🎸 ギャラリーコンサート(I) フラメンコギター・久保博久 (入場・鑑賞共無料)	
18(土)	14:00-15:30	👤 パネルトーク(I) 研究会『絵画と写真 part2』 パネラー：吉武研司 齋藤 研 金井訓志 高松和樹	独立展会場 第1室
19(日)	14:00-15:30	👤 ギャラリートーク(I) 今井信吾 花澤洋太 奥谷太一	独立展会場 第1室～
20(月)	14:00-15:00 16:00-17:00	🚩 ギャラリーツアー	独立展会場 第1室～
21(火)	休 館 日		
22(水)	14:00-15:00 16:00-17:00	🚩 ギャラリーツアー	独立展会場 第1室～
23(木)	14:00-15:00 16:00-17:00	🚩 ギャラリーツアー	独立展会場 第1室～
24(金)	14:00-15:00 16:00-17:00	🚩 ギャラリーツアー	独立展会場 第1室～
	18:00-19:00	🎸 ギャラリーコンサート(II) マリンバ・亀井博子 (入場・鑑賞共無料)	
25(土)	14:00-15:30	👤 パネルトーク(II)『独立の今までとこれから』 パネラー：今井信吾 奥谷 博 馬越陽子 高澤哲明	独立展会場 第1室
26(日)	14:00-15:30	👤 ギャラリートーク(II) 本田希枝 相田幸男 山本雄三	独立展会場 第1室～
27(月)	10:00-14:30 札止め	最 終 日	

※変更の場合もございます。詳細は、独立展のホームページか会場係員にご確認ください。

83rd 独立で輝いてみませんか？

独立展

2015/10/14(水)-26(月)

国立新美術館

搬入日：10月1日(木)・2日(金)

詳しくは、独立展のホームページまで！

<http://www.dokuritsuten.com>



独立ノート 第4号

発行日/2014年10月1日

発行者/独立美術協会

〒141-0031

東京都品川区西五反田2-13-8-507

Tel. 03-3490-5881

Fax. 03-6420-0026

E-mail. dokuritsu@ceres.ocn.ne.jp

URL. <http://www.dokuritsuten.com>

印刷/朝日印刷工業株式会社